

『論語』ってやっぱりすごい

図書館係 阿部健治

いつもは「読書のすすめ」のようなことを書くこの欄だが、今月はちょっと趣向を変えて、今年度のNHK大河ドラマの主人公渋沢栄一について書いてみよう。渋沢は 2024 年度には、福沢諭吉の後を継いで「一万円札の顔」になる予定で、ドラマではイケメンの吉沢亮が演じている（彼は渋沢についてもよく勉強していて堂々たる演技。若いのに本当に立派。）「時の人」だ。大河ドラマ、いつもは観ないけど今年は観てる、なんて人がいたら、その人は本当にラッキーだ。偉人渋沢を知ることでもできて一挙両得だ。

渋沢は江戸時代も末期の 1840 年、埼玉県深谷市（といっても市の最北で、利根川を渡って向こう岸はもう群馬県の「血洗島（ちあらいじま。すごい地名だ!）」という所。渋沢の言葉遣いも筆者には懐かしい群馬弁だ。）の豪農の家に生まれた。そして、この時代の若者の常として「攘夷思想」に染まるが、不思議な運命の成り行きで、打倒するはずだった「一橋慶喜（後の十五代将軍徳川慶喜）」に仕えることになる。ここで頭角を現した渋沢は、パリ万博に派遣された慶喜の弟昭武（本来の目的は幕府がフランスに借金するための渡仏だったらしい）の随行員となったが、その間に日本では維新が進行し、幕府が薩長軍に倒されて明治新政府ができていた。

帰国後の渋沢は旧主慶喜が蟄居していた静岡を訪れ、そこで旧幕臣と地元の商人を結びつけ、今風に言えば「静岡モデル」を作り上げて大成功を収めた。しかし、これを伝え聞いた明治新政府は早速、「できる人」である渋沢を招聘する。ここで大見得を切り、誘いを断って帰ろう（何しろ旧主慶喜を貶めたにつっき薩長政府ですからね）とした渋沢だったが、大隈重信（早稲田を作ったあの人ですよ）に説得され、明治新政府の役人になるのである。

ここで彼が手がけたのが全国規模の測量、度量衡の統一、貨幣制度改革及び租税法の改正（江戸時代は米がすべての基準で租税は物納だった。これを全て金納にするのだから本当に大変だったろう。）、鉄道敷設、及びそれを用いた郵便制度の確立（当時は郵便という言葉さえなく、それまでは飛脚だったわけだから、これまた大変さが想像できる。）などだった。いかに草創期とは言え、その慧眼（本質を鋭く見抜く力）と実行力は驚異的だ。この業績が正に評価されれば、彼は早晩国の代表者になってもおかしくなかった。しかし、政治には自ずからこれとは別の面がある。時の権力者大久保利通とぶつかった渋沢は井上馨とともに辞職するのだが、これは政府に不満を持ったからというだけではなかった。

渋沢は政治主導の施策では社会は活性化せず、広く民業を興すようにしないと社会は発展しないと考えていた。官から民に下りた渋沢は第一国立銀行を始めとして、製紙・紡績・鉄道・郵船・電気・ガスと、社会のインフラになる分野で新会社を次々と設立。彼が関わった会社は 500 を数えるとも言われる。これらの業績により、渋沢は「日本資本主義の父」と呼ばれるようになるのである。

しかし、この「日本資本主義の父」という呼称は渋沢にとっては不本意だったのではないかと筆者は思う。「資本主義」は「capitalism」の訳語で、「ものを自由に売買してよい」社会体制を指すが、それは同時に「資本（としての生産手段）を私有する資本家が、労働者から労働力を買い、それを上回る価値のある商品を生産し、利潤を得る」という構造を生み出す。ここから「労働力の搾取」という大問題が起こるのはマルクスが「資本論」で指摘した通りである。

渋沢は数々の企業を興していくときに、必要な元手（資本）を多くの人々に出資させるという手法を採った。彼はこれを「合本（多くの人から集めたものを合わせて資本＝元手とする）」と呼んだ。だからたぶん、渋沢は内心では自分が推し進めているのは資本主義ではなく「**合本主義**」だと思っていたはずである。

例えば、彼の最初の大事業である第一国立銀行の設立にしても、単独の勢力には受け持たせず、当時の二大勢力であった「三井組」と「小野組」に共同出資・運営させることにこだわった。一つの勢力にやらせた方が運営は楽だが、わざとライバルである二大勢力に受け持たせ、力を合わせて社会を支えるという責任感を植え付けようとしたのである。彼が手がけた 500 もの企業にしても、経営が軌道に乗ると有能な者に任せて速やかに自分はそこから手を引いていった。

ドラマでは、この後、岩崎弥太郎率いる三菱グループとの角逐が繰り広げられることになるが、渋沢がその気になれば、三菱グループ以上の大財閥を形成することはそれほど難しくなかったに違いない。しかし、渋沢は財閥を作ろうとしなかった。渋沢には「私利」という発想がなかった。「金」は事業を行って社会を豊かにした後の残りかすだと言っているが、正にその通りに生きたのだ。

渋沢は女子教育にも力を入れ、日本女子大学の創立に携わり、第 3 代の学長にもなった。文化事業にも力を入れ、帝国劇場を作ったりもしたが、特筆すべきは彼の社会福祉や慈善活動（1923、関東大震災の時には 83 歳で「大震災善後会」の副会長を務めた）である。それらは総計すると 600 にも上ったという。

これらの延長線上にあるのが、渋沢が晩年、心血を注いだ「日米友好」のための活動である。渋沢は 1902（明治 35）年 62 歳の時に欧米を視察し、アメリカのルーズベルト大統領と会見している。これを皮切りに 1909 年にはアメリカの 60 都市を訪問、1915 年にはやはり渡米してウィルソン大統領と会見、翌年、76 歳で実業界から身を引くが、1921 年（81 歳）には排日運動改善のため高齢をおして渡米、ハーディング大統領と会見している。この頃、日米関係はかなりきな臭くなっており、これが太平洋戦争に繋がっていくのである。更に 1926 年から 1930 年（この年渋沢は 90 歳、翌年には死去する）までは第一次世界大戦終結日である 11 月 11 日には毎年ラジオ放送で平和を訴える演説をしている。

これらの功績が評価されて、渋沢は 1926,1927 と 2 年続けてノーベル平和賞候補にもなっている。ノーベル賞は欧米中心の傾向があり（アジアの国のことはヨーロッパには伝わりづらかった）、受賞には至らなかったが、その業績が正に評価されれば受賞の価値は十分あったと筆者は思う。

渋沢がこれほど、社会のため、民衆のために励んだのは、若き日に「論語」を熟読し、その精髓である「民を大切にする」という孔子の社会思想を深く身に刻みつけたからである。怠け者の筆者などには、「論語」の教えは峻厳すぎて時に教条的にも思えてしまうが、渋沢は粘り強くこれを実践し続けたのである。

2500 年も前に生まれた孔子の思想の素晴らしさが「商い」の神髄をも会得した（少年の頃から藍玉の行商などで身につけた）渋沢によって体现され、更に輝かしさを増したということには感動を禁じ得ない。

本年 7 月、五輪の開会式で来日したアルメニアのアルメン・サルキシヤン大統領が渋沢史料館を訪れ、「国の恩人だ」として感謝のメダルを贈ったという。約 100 年前、オスマン帝国（現在のトルコ）に迫害された難民のために多額の寄付金を集め、届けたことのお礼だそうだ。「後世に残る仕事」とは正にこういうものだろう。

渋沢が語ったことは『論語と算盤』（角川ソフィア文庫）という本にまとめられている。学校図書館で今年購入したこの本の後付けを見ると、初版発行が平成 20 年で、令和 2 年 1 月時点（10 年程）で 39 刷になっている。もとは 1927（昭和 2）年刊のこの本、100 年近くたった書物が今日これだけ読まれていることには改めて驚かされた。齋藤孝明治大教授の解説による『図解 渋沢栄一と「論語と算盤」』も図書館にはあるので是非読んでみられたい。